新古今和謌集

上之二

853
166

部類　和歌
函號　二架　七七
書名　二十一代集
册數　五六

第七一三號

新古今和歌集巻第六

冬哥

千五百番哥合に初冬の心をよめる

皇太后宮大夫俊成

月令曰露結テ為霜

をきあかす秋の別の袖の露霜こそむすへ冬やきぬらん

天暦御時神無月といふことをかみにをきてうた
つかうまつりけるに　藤原高光

伊勢物語
紅葉さ及の日
冬きしちるまて
下句同

神無月風に紅葉のちる時はそこはかとなく物そ悲しき

題しらす　源重之

名とり川やなせの浪そさはく成紅葉やいとゝよりてせくらん

渡邊千秋蔵書

ガラス使用

後冷泉院御時うへのをのことも大井河にまかり
まかりて紅葉浮水といふ心をよみ
侍りける　藤原資宗朝臣

参議資房子
右馬頭

いかたしよまてこととはむ水上はいかはかり吹山の嵐そ

大納言経信

ちりかゝる紅葉なかれぬ大井川いつれゐせきの水のしからみ

大井川にまかりて落葉滿水といふ心をよみ
侍りける　藤原家経朝臣

参議廣業子
卒天永二年

たかせ舟しふくはかりに紅葉のなかれてくたる大井川かな

深山落葉といふ心を

源俊頼朝臣

後拾雑五
山里にまかりてよ
みはへりける　源頼実
日もくれぬ人も帰
りぬ山里は峯の
あらしのおとはかりして

家集
山家落葉

日くるれは逢人もなしまさきちる峯の嵐の音はかりして

題しらす

藤原清輔朝臣

おのつから音するものは庭の面に木の葉吹まく谷の夕風

春日社歌合に落葉といふことをよみて
奉りし

前大僧正慈円

木葉ちる宿にかたしく袖の色をありともしらてゆく嵐哉

右衛門督通具

このはちる時雨やまかふ我袖にもろき涙の色と見るまて

藤原雅経

萬丹集 收詞千似まくらとめくのうらにやみとりの
ゆふこえて

新後撰五一　　権中納言師時
夕まくれしある人を浮雲のそらにわかるゝ名をやおしまし

六帖 第二
夕されは大江の山の秋風に吹しくれのあらしふくらん

もみちらう海さむけれぬらんきさの山

七條院大納言　（中納言実綱女）

とわれし梅けとは深きやあらん

信濃　（日吉祢宜允仲女 後号後鳥羽院下野）

時雨行袖もかわかぬ足曳の山乃木枯にふかれし吹比

藤原秀能　（大蔵大夫）

上乃高光歌
[illegible]

山里乃風すさましき夕暮に木乃葉乱て物そかなしき

新後拾遺冬 [illegible]
[illegible]
[illegible]

祝部成茂　（日吉祢宜允仲子）

陶明四時詩云
冬嶺秀孤松

冬のきて山もあらはに木葉ふり残る松さへ嶺にさひしき

五十首哥たてまつりし時

宮内卿

拾冬　僧正遍昭
からにしき枝にひとむらのこれるを秋のかたみとたゝぬなりけり

からにしき秋乃形見や立田山散あへぬ枝にあらし吹なり

頼輔卿家哥合に落葉の心を

藤原資隆朝臣　（皇后宮亮重家子 前肥後守治承三年）

下具平親王御歌云
又木葉ちる宿をはきゝもわかれけり
日もさえもしくれ
きかぬよも

時雨かときけは木乃葉の降物をそれにもぬるゝ我袂哉

題しらす　（新勅撰）

法眼慶算　（少納言俊通子）

後雑　枇杷左大臣
かしはきに葉もりの神のましけるをしらてそをりしたゝりなさるな

時しもあれ冬は葉もりの神無月まはらに成ぬ杜の柏木

正治百首
いつしかと葉もりの神も月
まはらなるらんかしはきのもり

住吉神主

津守國基　（従五下忠康子 延久三年叙爵）

いつ乃まに空のけしきの変らんはけしき今朝の木枯の風

西行法師

ガラス使用

[illegible]

うつりゆく雲に嵐の声すなりちるかまさきのかつらきの山

七條院大納言 （中納言[illegible]女）

初時雨忍の山のもみちはを嵐吹けとはそめすやあるらん

信濃 （日吉祢宜允仲女 後号後鳥羽院下野）

時雨つゝ袖もほしあへす足引の山の木葉に嵐ふく比

藤原秀能 （大[illegible]大夫）

上乃高光朝臣歌
[illegible]

山里の風すさましき夕暮に木の葉みたれて物そかなしき

（新後拾遺冬 源[illegible]女読之[illegible]）

祝部成茂 （日吉祢宜允仲子）

淵明四時詩云
冬嶺秀孤松

冬の来て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ峯にさひしき

又千首哥よみてたてまつりし時

宮内卿

拾冬 僧正遍昭
[illegible]

からにしき秋のかたみや立田山ちりあへぬ枝に嵐ふくなり

刑部卿家哥合に落葉を

藤原資隆朝臣 （[illegible]重兼子 肥後守[illegible]治承三年）

下具平親王御歌云
又木葉ちる宿はきゝわく事そなき
時雨する夜も時雨せぬ夜も

時雨かときけは木の葉のふるものをそれにもぬるゝ我袂かな

題しらす （新勅[illegible]）

法眼慶算 （少納言俊通子）

後雑 枇杷左大臣
[illegible]

時しもあれ冬は葉守の神無月まはらに成ぬ杜の柏木

住吉神主 津守国基 （従五下忠康子 延久三年叙爵）

正治[illegible]百首
[illegible]

[illegible]

西行法師

月を待つ人ゝもみ晴まに家ちかあらそふ袖にしくれけるかな

前大僧正覚忠　聖作　法性寺座主

神無月木ゝの木の葉ハ散りはてゝ庭にそ風の音ハきこゆる　寺

清輔朝臣

千載　祝部宿祢成仲
夏の夜ハ月の光とてしらすして明ぬるあしの戸ハさゝん

金葉夏　摂政左大臣
この月のてる日のかけにまかふ風のみそ秋のけしき
[illegible]
見えける

さしなからいかにしくるゝ山邊なるらん

山家時雨といふ心を

藤原隆信朝臣

雲はれて後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松のした露

寛平御時后宮歌合に

よみ人しらす

長門本為経子
玉真永二年
山をもるらんと雲
乃しく[illegible]の風をハ
[illegible]

廣万

神無月時雨ふるらし佐保山のまさきのかつら色まさりゆく

題しらす

中務卿具平親王

木枯の音に時雨をきゝわかてもみちにぬるゝ袂とそ見る

中納言兼輔

朗詠　もろ六
時雨ふる音ハすれとも呉竹のなと世とともに色もかはらぬ　元胡

六帖　素性
素性集不載
萬葉集有之

十月はかりときはのもりをすくとて

能因法師

時雨の雨そめかねてけり山城のときはの杜の槙の下葉ハ　本

一万十
しくれのあめまなくしふれは
[illegible]

題しらす

清原元輔

家
冬を浅みまたき時雨と思ひしをたえさりけりな老の涙も　神衣　まさりける　たえさりける

[illegible]

長門守為経子
玉貞永二年
雲をはらふ[illegible]の風とは[illegible]

月を待たかねの雲ハ晴にけり心あるへき初しくれかな

前大僧正慈円　聖 法性寺殿子

神な月木々の木の葉ハちりはてゝ庭にそ風の音ハきこゆる　寺

清輔朝臣　山居時雨 家集

柴の戸に入日の影ハさしなからいかにしくるゝ山へなるらん

山家時雨といふ心を

藤原隆信朝臣

雲はれて後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松の下露

寛平御時后宮歌合に

よみ人しらす

夏万

神な月時雨ふるらし佐保山のまさきのかつら色まさりゆく

六帖 兼盛
兼盛集不載
兼輔集有之

題しらす　中務卿具平親王

木枯の音に時雨をきゝわかて紅葉にぬるゝ袂とそ見る

中納言兼輔

朗詠　古六

時雨ふる音ハすれとも呉竹のなとよとゝもに色もかはらぬ　も 朗

十月はかりときはの杜をすくとて

能因法師

時雨の雨そめかねてけり山城のときはの杜のまきの下葉は

万十
しくれのあめまなくしふれはまきのはもあらそひかねていろつきにけり
[illegible]

題しらす　清原元輔

家

冬をあさみまたき時雨と思ひしをたえさりけりな老の涙も

鳥羽殿にて旅宿時雨といふことを

後白河院御製

まはらなる柴の庵に旅ねしてしくれにぬるゝさよ衣かな

時雨を

前大僧正慈円

大和物語
ちゝの色にうつろふらめと
[illegible]
[illegible]

やよしくれ物思ふ袖のなかりせは木葉の後になにを染まし

冬哥中に

太上天皇

上の句次の万葉の歌を
とれるなるへし

ふかみとりあらそひかねていかならん間なくしくれのふるの神杉

題しらす

人麿

此歌詠萬葉より
[illegible]
[illegible]
[illegible]

万十作者未詳
人丸集

しくれの雨まなくし降れはまきの葉もあらそひかねて色付にけり

かくまえめくとぬ　あきらめて

春雨にあらそひかねて我宿のさくらの花は咲そめにけり　廿万十

白露にあらそひかねてさける萩ちらはをしけむ雨なふりそね

和泉式部

雲間乃月のいてやと
[illegible]
[illegible]

世中に猶もふるかなしくれつゝ雲まの月のいてやと思へは

百首哥よませ給ける

二条院讃岐

後撰
六帖
[illegible]
[illegible]
[illegible]

折こそあれなかめにかゝる浮雲の袖もひとつにうちしくれつゝ

題しらす

西行法師

秋しのや外山の里やしくるらんいこまのたけに雲のかゝれる

道因法師

後撰
[illegible]
[illegible]
[illegible]

晴くもり時雨はさためなき物をふりはてぬるは我身なりけり

千五百番哥合に冬哥

源具親

今は又ちらてもまかふしくれかなひとりふりゆく庭の松風

新後拾遺　[illegible]の庭の松風　後京極大臣

拾遺冬　紀貫之
[illegible]

題しらす
俊恵法師
みよしのゝ山かきくもり雪ふれはふもとの里はうちしくれつゝ
[illegible]

百首哥たてまつりし時
入道左大臣（法名静空）（三条左大臣）
まきの屋に時雨の音のかはるかな紅葉や深く散つもるらん

三条内大臣

千五百番哥合に冬哥
二條院讃岐
世にふるはくるしき物をまきの屋にやすくもすくる初時雨哉

家集云　信明
屏風の絵に紅葉
ちりかゝるところ人

題しらす
源信明朝臣（歌）（胡頼）
ほの〳〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風

中務卿具平親王
紅葉ゝを何おしみけん木の間よりもりくる月は今夜こそみれ

詞花冬　読人不知
秋をへて木の葉の色も
かはりきゝ月をみし
しもそへてけれ

宜秋門院丹後
吹はらふ嵐の後のたかねより木葉くもらて月や出らん

春日社哥合に暁月の心を
右衛門督通具
霜こほる袖にもかけはのこりけり露よりなれし有明の月

和歌所にて六首哥たてまつりし冬月
藤原家隆朝臣
なかめつゝいくたひ袖にくもるらん時雨にふくる有明の月

題しらす
源泰光（従三位）（左京大夫師光子）

ガラス使用

定なくしくるゝ空の村雲にいくたひ同し月をまつらん
千五百番歌合に
源具親
いまよりは木の葉かくれもなけれとも時雨に残るむら雲の月
題しらす
晴くもる影を都にさきたてゝしくると告る山のはの月
五十首歌たてまつりし時
寂蓮法師
たえ〳〵に里わく月の光かな時雨をおくる夜半のむら雲
雨後冬月といふ事を
良暹法師
今宵こそ[illegible]まし袖と時雨けるとしみえて[illegible]の月かな
題しらす
曽祢好忠
露霜の夜半に（と）起ゐて冬の夜の月みるほと（し已上家）に袖はこほりぬ
前大僧正慈圓
紅葉はおのか染たる色そかしよそけにをける今朝の霜かな
西行法師
小倉山ふもとの里に木の葉ちれはこすゑにはるゝ月をみるかな
五十首歌よみてたてまつりしに
藤原雅経

[illegible]
[illegible]
[illegible]
後拾遺雑秋
良暹法師
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ガラス使用

俊成卿女此歌と
同く千五百番の
歌合に出たる

秋の色を拂ひはてゝや久かたの月のかつらにこからしの風

題しらす

式子内親王

風さむみ木の葉晴ゆく夜な〱にのこるくまなき庭の月かけ

殷富門院大輔

我門のかりたの面にふす鴫のとこあらはなる冬の夜の月

ホ林乃寒月

藤原清輔朝臣

冬枯の杜の朽葉の霜の上に落たる月の影のさむけさ

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

さえわひてさむる枕に影みれは霜ふかき夜の有明の月

右衛門督通具

霜むすふ袖のかたしきうちとけてねぬ夜の月の影そさむけき

五十首哥たてまつりし時

藤原雅経

影とめし露のやとりを思ひ出て霜にあとゝふ浅茅生の月

橋上霜といふことをよみ侍ける

法印幸清

石清水別当
成清か子

かたしきの袖をや霜にかさぬらん月によかるゝ宇治の橋姫

題しらす

源重之

此哥百首乃中冬哥その中に
ある也後拾遺に
夏刈乃玉江の芦をふみしたき
しらさきもむれゐしる
乃立空そなき
これらはその中に
ある也能きまてゝゝ上

ホ古来夏

夏かりの荻のふるえはかれにけりむれゐし鳥は空にやあるらん

荻

かれえ

も 氷

ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
不審

冬の夜のなかきをおくる[illegible]
[illegible]
つき[illegible]の一字

万二　人丸
さゝのはゝみ山もさやに
みたるとも我は妹
おもふわかれきぬれは

藤原道信朝臣
さ夜更て声さへさむきあしたつはいくへの霜かをきまさるらん

冬哥中に
太上天皇
冬の夜のなかきを送る袖ぬれぬ暁かたのよものあらしに

百首哥たてまつりし時
摂政太政大臣
さゝの葉はみ山もさやにうちそよきこほれる霜をふく嵐かな

崇徳院御時百首哥たてまつりけるに
藤原清輔朝臣
君こすはひとりやねなんさゝの葉のみ山もそよにさやく霜夜を

[illegible]
[illegible]
[illegible]

拾
かさゝきの[illegible]
[illegible]
[illegible]
らん

大和物語
かさゝきのわたせる
はしの霜のうへをよは
にふみわけことさ
らにこそ

題しらす
皇太后宮大夫俊成女
霜かれはそこともみえぬ草の原たれにとはまし秋のなこりを

百首哥中に
前大僧正慈円
霜さゆる山田のくろのむら薄かる人なしにのこるころかな

題しらす
曽祢好忠
草のうへにこゝら（そこら）玉ゐし白露を下葉の霜とむすふ冬かな

中納言家持
かさゝきのわたせる橋にをく霜のしろきをみれは夜そ更にける

うへのをのこともきくあはせし侍りけるついてに
延喜御哥

ガラス使用

續古今　同御製
おくしもゝむすひき
時乃菊乃花ちらう
つねよ色乃うつろひ
ありけ

時雨れしゆふべの野島が崎も見えにけり霧のまがきにほのかなる夕

延喜十四年尚侍ふちはらの満子に菊宴給
はせられけるに

中納言兼輔

家集ろし

菊花たをりては見じ初霜のおきながらこそ色まさりけれ

秋の比大井河に行幸侍りける日

坂上是則

新千載　秋下　藤原清正
紅葉せぬときはの松もつき
色うつろへるにはまて
てらさるゝを見ん

家

影さへに今はと菊のうつろふは水の底にも霜やおくらん

ちるこ家

題しらす

和泉式部

万代
道のへの尾花かもとの
思ひ草今さら
にものをおもはん

野辺見れば尾花がもとの思ひ草枯れゆく冬になりぞしにける

西行法師

津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり

崇徳院に十首哥よみてつかうまつる時

大納言成通

大納言宗通子
前ゝゝ侍従

冬深く成にけらしな難波江の青葉ましらぬ芦のむら立

題しらす

西行法師

後拾　和泉式部
さびしさに煙をたにも
たゝしとて柴をり
くふる冬の山里

冬草のかれゆくあはれ
いかに見しありさま
ほしいほかとまらし
なきこそわろさくし

さびしさにたへたる人の又もあれな庵をならべん冬の山里

わつらひ侍りける時都の人につかはしける

康資王母

家
さとの庭の叫ほり
さらぬして以上家

わがやどの庭の冬草しげりつゝひく人絶えぬ宿の道かな

ガラス使用

万二　大津皇子
足引の山のしつくに
いもまつと我立
ぬれぬ山のしつくに

冬哥とてよみ侍りける　守覚法親王

むし思ふさ夜のねさめの床さえて涙もこほる袖のうへかな

百首哥たてまつりし時　皇太后宮大夫俊成

さゆる夜は山のしつくも音たえて槙の下葉にたるひしにけり

題しらす

かつ氷かつはくたくる山川の岩まにむせふ暁のこゑ

摂政太政大臣

きえかへり岩間にまよふ水のあわのしはしやとかる薄氷かな

枕にも袖にも涙つららゐてむすはぬ夢をとふあらしかな

西行の清滝川の
[illegible]
[illegible]

源槿
とけてねぬ袖さへ
かたしき[illegible]
むすほほれつれ[illegible]
[illegible]

六百番　定家
[illegible]
[illegible]
[illegible]秋の[illegible]の袖

古今
さむしろに衣かたしきこよひもや
われをまつらむ
うちのはし姫

万三　人丸
もののふのやそうち
川のあしろきに
いさよふ浪のゆくへ
しらすも

五十首哥たてまつりし時

みなかみやたえたえこほる岩間より清滝川にのこる白浪

百首哥たてまつりしとき

かたしきの袖乃氷もむすほほれとけてねぬ夜の夢そみしかき

最勝四天王院乃障子に宇治川かきたる所　太上天皇

風雅雑上　[illegible]
[illegible]　俊成

橋姫乃かたしき衣さむしろにまつ夜むなしき宇治乃曙

玉葉冬　[illegible]
[illegible]
二品法親王守覚

前大僧正慈円

網代木にいさよふ浪の音ふけてひとりやねぬる宇治の橋姫

百首哥中に　式子内親王

好忠集
鴨のゐる入江の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

後拾
さよふくるまゝに
みぎはや氷るらん
とほざかりゆく
しがのうらなみ

拾遺冬
冬の池の上は氷に
とぢられていかで
か月の底に入るらん

万六　神亀二年五月
千載冬　右大臣
[illegible]
月ゟの　下句

見るまゝに冬はきにけり鴨のゐる入江のみぎはうすごほりつゝ

摂政太政大臣家歌合に湖上冬月

藤原家隆朝臣

拾遺冬　恵慶法師
天の原そらさへさえやわたるらん
氷と見ゆる冬の夜の月

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りて出る有明の月

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

続千載雑上
[illegible]
[illegible]
読人不知

ひとり見る池の氷にすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

題しらず　山部赤人

万六
うば玉の夜のふけゆけば楸おふるきよき河原に千鳥しば鳴

さ月の[illegible]千鳥[illegible]

伊勢大輔

行さきはさよふけぬれど千鳥なくさほの河原はすぎうかりけり

家集云しまの助にて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

みちのくにまかりける時よみ侍りける

能因法師

夕されば塩風こしてみちのくの野田の玉河千鳥鳴なり

題しらず　重之

家
夫木十七　文治六年女御入内御屏風
ありあけの月まつうらの浪の音に
千鳥[illegible]

白浪にはねうちかはし浜千鳥かなしきものは夜の一声

万
[illegible]
小島の浜[illegible]
[illegible]

後徳大寺左大臣

夕なぎにとわたる千鳥浪まより見ゆる小島の雲にきえぬる

堀河院に百首哥たてまつりけるに

祐子内親王家紀伊

浦風に吹上の濱の濱ちとり浪たちくらし夜半になくなり

五十首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

月そすむ誰かはこゝにきの國や吹上の千鳥ひとり鳴なり

千五百番哥合に

正三位季能

さ夜千鳥聲こそちかくなるみかたかたふく月に塩やみつらん

最勝四天王院の障子になるみのうらを
書たる所

藤原秀能

風吹はよそになるみのかたおもひおもはぬ浪になく千鳥かな

おなし所

権大納言通光

浦人乃日もゆふ暮になるみかたかへる袖より千鳥なくなり

文治六年女御入内屏風に

正三位季經

風さゆるとしまか磯のむら千鳥たちゐは浪の心なりけり

五十首哥たてまつりし時

藤原雅經

はかなしやさてもいく夜か行水に数かきわふる鴛の獨寝

堀河院に百首哥たてまつりけるに

玉葉　[illegible]
紀のしめいはらて
[illegible]國や
紀の[illegible]を
[illegible]とも
[illegible]

夫木十七　家仲朝臣
さよふけしなるみの
浦より[illegible]
うらかなしくも[illegible]

六帖并土左日記
まてといふ[illegible]八
又みる風と浪とに
みせ[illegible]
らん

万十一　紀の[illegible]
[illegible]
[illegible]
つるも

[illegible]
[illegible]
人とおもふ[illegible]

ガラス使用

永縁僧正妹也
侯子内親王家女房
号由利花とし

河内

水鳥のかものうきねのうきなから浪の枕にいく夜ねぬらん

題しらす　湯原王

百三

吉野なるなつみの河の川よとに鴨そなくなる山かけにして

能因法師

古今
みやのしたにたてえ
うしみかいちのし
かちちもなさなし
おそかくそん

閨の上にかたえさしおほひそともなる葉ひろかしはに霰ふるなり

法性寺入道前関白太政大臣

さゝ浪や志かの浦風さえて比良の高ねに霰ふるなり

人麿

六

万十作者未詳
人丸集

やたの野に浅茅色つくあらち山峯のあわ雪さむくそあるらし

雪のあした基俊かもとへ申つかはしける　勝西上人

たつねくる人もしら屋の軒そへつりなむ今朝は初雪やふる

返し　藤原基俊

ふる雪にまことにしのやいかならんけふ都にあとたえにけり

冬ころおまへにさふらひて人々歌よみ侍り　権中納言長方

初雪はまきの葉しろくふりにけりこや小野山の冬のさひしさ

里に出侍りけるころ初雪ふりける日　紫式部

ガラス使用

風雅冬　従命
夜さえて霜あらしの
嶺のへの雲の葉
白きはさめの初雪

埋れなかくうきに乗らん世をそむくわれはかりの庭につもる初雪

百首歌に　式子内親王

さむしろの夜半の衣手さえ〳〵て初雪しろしをかのへの松

入道前関白太政大臣家歌合に
雪をよめる　寂蓮法師

あはれそむかきさめん人のあとくれぬるみ山路の雪は白雪

雪のあした後徳大寺左大臣のもとにつかはしける　皇太后宮大夫俊成

けふはもし君もやとふとなかむれとまた跡もなき庭の雪かな

返し　後徳大寺左大臣

今そきく心は跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれとも

夢之集
草の露霜もあつし
今朝はけふよ
もみちしらぬは

拾遺冬　忠見
雲のゐるつゝの色
きよりもおほくの
なかきつりて

題しらす　前大納言公経

白以

志ら山に年ふる雪やつもるらん夜半に片しく袂さゆなり

夜深聞雪といふ事を　刑部卿範兼

あけやらぬねさめの床にきこゆなり籬の竹の雪の下折

うへのをのことも暁望山雪といふ心をつか
うまつりけるに　高倉院御歌

をとは山さやかに見ゆる白雪をあけぬとつくる鳥の声かな

初瀬にまうでたりける人に初雪のふりける日とて侍

万三　長奥丸
くるしくもふりくる雨か
三わのさき佐野のわたり
に家もあらなくに

雪のふりける日上東門院に侍ける女房によみて
つかはしける　　藤原家経朝臣

山里は道もやみえす成ぬらん紅葉とゝもに雪のふりぬる

野亭雪をよみ侍ける
藤原国房　　石見守　五位　　玄蕃頭範光子　玉　永保四七

さひしさをいかにせよとて岡へなるならの葉しだり（きイ）雪のふるらん

百首哥たてまつりし時
藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

摂政太政大臣大納言に侍ける時山家雪といふ
ことをよませ侍けるに

待人の麓の道は絶ぬらん軒端の杉に雪おもるなり

松かし家にて詩歌を合せ侍し冬哥
侍けるに伏見里の雪を
藤原有家朝臣

夢かよふ道さへ絶ぬ呉竹の伏見の里の雪の下おれ

家に百首哥よませ侍けるに
入道前関白太政大臣

降雪にたくもの煙かきたえてさひしくもあるか塩竈の浦

題しらず
赤人

玉葉秋上　隆祐朝臣
たれ人もとひこぬ庵ん
いろかへぬ杉まへり
杉の秋風のくまし
月清集下
さらにしもいかにまよ
人のとひこし杉の
杉の木のみかくつまし
壬二集下
待かねる人もとひとも
月日へぬ杉の杉の
ゆきつもる也
万九
たゝきれ入しひとく
やまの人のうゝとの四
井にかゝりけし

家集云延喜御時
内裏御屏風書
歌ニ六そ山里に
住人の雪みて侍る
ところ

万三
たこの浦にうちいてゝみれは白妙のふしのたかねに雪はふりつゝ
（ましろにそ　万下句　ける）

延喜御時哥たてまつれと仰られけれは
紀貫之

六　あと
雪のみやふりぬとは思ふ山里に我もおほくの年そつもれる
（乙六下句　へにける）

守覚法親王五十首哥よませ侍けるに
皇太后宮大夫俊成

雪ふれは峯のまさかきうつもれて月にみかける天のかく山

題しらす
小侍従

かきくもりあまきる雪のふる里をつもらぬさきにとふ人もかな

前大僧正慈圓

月清集
みまへき人ちきき
やとの庭のうへに
雪の跡[illegible]
とふ[illegible]

庭の雪に我跡つけていてつるをとはれにけりと人やみるらん

正治二年院当座撰歌合
権律師隆[illegible]

まてとよし人をたのめし
[illegible]
ことはまさし

あらしふく[illegible]の山[illegible]に雪[illegible]

曽祢好忠

冬草のかれにし人の今さらに雪ふみわけてみえんものかは
（のみ）

雪のあしたおほはらにてよみ侍ける

寂然法師
（連下八枚）
（丹後守為忠子　俗名頼業）

後拾遺　兼盛
雪つもる跡つけまよふ
山里にいかにしてかは
きえきりらん

尋きて道わけわふる人もあらしいくへもつもれ庭の白雪

百首歌中に
太上天皇

後撰　千
夕暮は浦くも
さへそ[illegible]
花も紅葉も枝
まちかね[illegible]

このころは花も紅葉も枝になししはしなきえそ松の白雪

千五百番歌合に

源氏若菜
かすみにも[illegible]
しらぬ[illegible]
[illegible]

後拾　七雑
[illegible]
[illegible]
[illegible]

土御門内大臣

源氏末摘
いつ人[illegible]
いろ[illegible]

草も木もふりまかへたる雪もよに春まつ梅の花の香そする

百首哥奉りし時

崇徳院御製

御狩すとかりはの小野の野風のよに霰ふるなりまたき鳥たつ

内大臣に侍りける時家哥合に

法性寺入道前関白太政大臣

みかりのゝしはしの恋はさもあらはあれそれのみ[illegible]野辺の鳥かり

京極前関白太政大臣高陽院哥合に

前中納言匡房

みかり野の[illegible]にはあかすもつもる雪[illegible]草[illegible]

左近中将公衡

[illegible]しかくれの[illegible]すみかまの[illegible]そよそに見えける

権僧正永縁

中ゝにきえはてなて埋火のいきてかひなき世にもあるかな

百首哥奉りし時

式子内親王

日数ふる雪けにまさる炭竈のけふりもさひし大原の里

和漢朗詠
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ガラス使用

抜書之 並盛

かへすまもとつらうら
つもれ年月を送
てもすてゝぬいらん

歳暮に人につかはしける
西行法師
をのつからいはぬをしたふ人やあるとやすらふほとに年のくれぬる（巻十）

年のくれによみ侍ける
上西門院兵衛
かへりては身にそふ物としりなからくれゆく年をなにしたふらん

皇太后宮大夫俊成女（八 抜）
へたてゆくよゝの面影かきくらし雪とふりぬる年のくれかな

大納言隆季（中納言宗家卿子）
あたらしき年やわか身をとめくらんひまゆく駒に道をまかせて

玉雜二 の人
まつのいとのいと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

俊成卿家に十首哥よみ侍けるに歳暮の心を
俊恵法師
なけきつゝことしもくれぬ露の命いけるはかりを思出にて

百首哥たてまつりし時
小侍従
思ひやれ八十の年のくれなれはいかはかりかは物はかなしき

題しらす
西行法師
むかし思ふ庭にうき木をつみおきて見し世にもにぬ年のくれかな

摂政太政大臣
いそのかみふるのゝをさゝ霜をへてひとよはかりにのこる年かな

前大僧正慈円

年明て浮世乃夢のさむへくハ（ハイ）くるとも今日はいとはさらまし

権律師隆聖（正行之子）

わきてこのわか年なみのふ夜暮て我身の程乃成ぬらん（かな）

百首歌たてまつりし時

入道左大臣

いそかれぬ年乃暮こそあはれなれ昔ハよそに聞し春哉（ら）

としのくれに身の老ぬることを歎てよみ侍ける

和泉式部

かそふれハ年乃残もなかりけり老ぬるはかりかなしきはなし（かなしきに）

入道前関白百首歌よませ侍けるに歳暮の心をよみて侍りける

後徳大寺左大臣

石はしる初瀬乃川のなみ枕はやくも年の暮にける哉（暮にけるかな）

（浪枕とは浪枕と きこえてゝれ）

土御門内大臣家にて海辺歳暮といふ心をよみ侍ける

藤原有家朝臣（とけ）

行年をおしまのあまのぬれ衣かさねて袖に浪やかゝらん（く）

寂蓮法師

老乃なみこえける身こそあはれなれ今年も今ハ末乃松山

（かきて 思ひとおもひしほし うらみてうらみすきを 末乃まつ山はなれん）

ガラス使用

千五百番哥合に
皇太后宮大夫俊成
けふことにけふやかきりとをしめとも又もことしにあひにけるかな

元慶六年日本紀
竟宴得大鷦鷯天皇
國経
はつゝきをくとめくみし
ものしてやすくをなし
てらみしらしめを
たほりきたかとのゝ又
（衍れ）はなみけるけふりつゝを
めくみとこそしらる
こと

延喜六年日本紀竟
宴得大鷦鷯天皇
左大臣從二位兼行左近衛大将藤原朝臣時平
多賀度能兒乃保利天
美礼波安女能之多與
母尓計布理弖伊万蘊
渡美奴留

新古今和歌集巻第七

賀哥

みつきものゆるされて国とめるを御覧して
仁徳天皇御哥
朗詠
たかきやにのほりて見れは煙たつ民のかまとはにきはひにけり

題しらす
読人しらす
万二十 家持
初春のはつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを

子日をよめる
藤原清正
なし
祢のひしてしめつる野邊の姫子松ひかてや千世のかけをまたまし

題しらす
紀貫之

ガラス使用

家集云延長二年（七イ）
ひたちのみこの
北のかたの御屏風
の歌よみて

家（六）
君か代の年の数をしろたへの濱のまさこと誰かしきけん（と）

亭子院の六十御賀屏風にわかなつめるところ（ひ 家全皆同）
とよみ侍りける

家集云同年上云天暦二年
閏七月右衛門督殿屏
風のうたよみてまつる
十月の[illegible]
その詞書へを

（家 六）
若葉おふる野へといふ野を君か為萬代しめてつまむとそ思ふ

延喜御時屏風哥

（家）
ゆきとも年をへて見る雪[illegible]

家集云[illegible]の五十賀せさせ
給ふ屏風にかきつける
不
みな[illegible]
おほくの八百万代の神
みまり

祐子内親王家にてさくらを

土御門右大臣（師房イ 具平親王子）

君か代にあふへき春のおほけれは散とも桜あくまてそ見ん
（花ちるてふ風をいとはてとあり）

七條の后の五十賀の屏風に

そもおほむさうんの
京のみやすん所の賀のおほ
おほきさいの宮のつかまつ
[illegible]
乃[illegible]

瀧の白糸もむすふ[illegible]
伊勢（つる六 家）

延喜御時屏風哥

貫之
（六 伊勢 〔貫之集〕 集云 貫之集云 延喜四年九月法皇の御六十賀 京極の御息所のつかうまつり給ふ時の御屏風のうた十二首）

年ことに生そふ竹のよゝをへてかはらぬ色を誰とかは見む

題しらす

躬恒
（古今集）

千年ふる尾上の松は秋風のこゑこそかはれ色はかはらす
忠岑

藤原興風

（隆六）
山川の菊の下水いかなれは流て人の老をせくらん
（くむ人さへや老いせさるらん 六）（ハせきくらん 家）

延喜御時屏風によめり

家集云同年（上云天慶三年）
同七月右馬頭殿屏
風のうた十五首
九月きく
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

家　六
かくしつゝ稚か月の菊の花いつれの秋のうへにあるらん　貫之

文治六年女御入内屏風に　皇太后宮大夫俊成

山人の折袖にほふ菊の露うちはらふにも千代は経ぬへし

貞信公家屏風に　元輔

家集 寛
[illegible]月をみちともまてぬ菊の末に万代[illegible]

題しらす　伊勢

六帖　伊勢
貫之集

伊勢集
松風と　貫之集
山風はふけとふかねとしら波のよするいはほはひさしかりけり

月
後一条院生れさせ給へりける九月月くまなかりける夜大二条関白中将に侍ける若き人ゝさそひ出て池の舟にのせて中嶋の（まつ）かけさしまはすほとをかしくみえ侍けれは　紫式部

くもりなく千とせにすめる水のおもにやとれる月の影ものとけし

永承四年内裏歌合に池水を　伊勢大輔

池水の世ゝにひさしくすみぬれはそこの玉もも光見えけり

堀河院乃大嘗會御禊日ころ雨ふりてその日に
なりて空晴て侍りけれは紀伊典侍に申ける
子ゝ拔
六條右大臣
顕房
土御門右大臣子
萬代の千とせの數も隠れなくくもらぬ空のひかりにそみる

天喜四年皇后宮の歌合に祝の心をよみ侍
りける
前大納言隆國
民部卿俊賢子
君か代はよはひそふ松の枝ことに葉ことに千世の数そこもれる

寛治八年関白前太政大臣高陽院歌合に
祝の心を
康資王母
萬代を松のを山のかけしけみ君をそいのるときはかきはに

後冷泉院おさなくおはしましける時卯枝杖の
松を人のこにたまはせけるによみ侍ける
大貳三位
相生のをしほの山乃小松原いまより千世のかけをまたなん

永保四年内裏子日に
大納言經信
夢之集　第一帖
此うたもおほくの
ふるきうたにちかきを
八雲御抄にもしるさる
今案此歌のちかきを
はゝかるとは
ちかへし
子日するみかきのうちの小松原ちよをはほかのものとやはみる

權中納言通俊
大弐経平子
ねのひしに野邊の小松をともとして年をかさねてひく[illegible]

ガラス使用

宣光かにしお心もみゆ

承暦二年内裏哥合に祝の心をよみ侍りける

前中納言匡房

君か代ハ久しかるへしわたらひやいすゝの川の流絶せて

（しれ　八抄日）

六支四帖　躬恒
躬恒集
六帖題苔

題しらす

読人しらす

ときはなる松にかゝれる苔なれハ年のをなかきしるへとそ思ふ

（ちよをこめたる　六本）
（六帖　支六日）
（一六支四）
（又六　三手集）
（又支六）
（くちもせすつゆしらぬ　六）
（けふあひそみる）

千載賀　日吉歌
左大臣
千世つもるやまのまへくことのはゝゆくすゑをあまをひさしくれ

二條院御時花有喜色といふ心を人々
つかうまつるに

刑部卿範兼

君か代にあへるハたれもうれしきを花ハ色にもいてにける哉

おなし御時南殿の花のさかりに哥つかうまつれと
仰られけれハ

参河内侍

加賀左衛門業女
風雅賀上
二条院御時ひくまつりて
かしこく後南殿
の桜ところく
参河内侍
ありし世のことをおもひて
やよひの桜ところく
たちよるへきにて

身にかへて花もおしまし君か代にみるへき春の限なけれハ

百首哥たてまつりし時

式子内親王

あめの下めくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御世の末々

京極殿にてはしめて人々哥つかうまつりし
に松有春色といふ事をよみ侍りし

摂政太政大臣

をしなへて木のめも春のあさ緑松にそ千世の色ハこもれる

百首哥たてまつりし時

六帖四帖　新枕
新恒集
六帖題苔

千載賀　日吉歌
左大臣
千世つもる[illegible]

承暦二年内裏哥合によみ侍ける

前中納言匡房

君か代はひさしかるへしわたらひやいすゝの川のなかれ絶せて

題しらす　読人しらす

ときはなる松にかゝれる苔なれは年のをなかきしるへとそ思ふ

六帖第六口　六本

二条院御時花有喜色といふ心を人々つかうまつりけるに

刑部卿範兼

君か代にあへるは誰もうれしきを花は色にもいてにける哉

同御時南殿の花のさかりに哥よめと仰られ

加賀守為業女
風雅雑上
二条院御時つかうまつりて
ちしく後南殿
新桜[illegible]

参河内侍
[illegible]

けれは

参河内侍

身にかへて花もをしまし君か代にみるへき春の限なけれは

百首哥たてまつりしとき

式子内親王

あめの下めくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御世の末々

京極殿にてはしめて人々哥つかうまつりし

に松有春色といふ事をよみ侍し

摂政太政大臣

をしなへて木のめも春のあさ緑松にそ千世の色はこもれる

百首哥たてまつりし時

古今　素性
ぬれてほす山ちの
菊の露のまに
いつかちとせを我
はへにけん

玉くしとは神にまつ
るさかきをいふと
と延喜式にみえたる
又日本紀に八十
玉籤とかける侍る
まさにいへるを

しき嶋やゝまとしまねも神代より君かためとやかためをきけん

千五百番哥合に

ぬれてほす玉くしのはの露霜にあまてるひかりいく世へぬらん

統乃ちとせとよろつ代ゆくらまん

皇太后宮大夫俊成

君か代は千世ともさゝし天の戸やいつる月日のかきりなけれは

千五百番哥合に

藤原定家朝臣

わかみちをまもらは君をまもるらんよはひはゆつれすみよしの松

八月十五夜和歌所哥合に月多秋友といふ事を

よまれ侍りし

寂蓮法師

たかさこの松も昔になりぬへしなを行末は秋のよの月

和哥所の開闔になりてはしめてまいりし日奏し
侍りし

源家長

もしほ草かくともつきし君か代のかすによみをくわかの浦浪

建久七年入道前関白太政大臣宇治にて人々に
哥よませ侍りけるに

前大納言隆房
隆季子

うれしさやかたしく袖につゝむらんけふまちえたる宇治の橋姫

古今
さむしろにころもかたしき
今宵もや
われをまつらんうちの
はしひめ

長秋詠藻
[illegible]

古今
[illegible]

嘉応元年ノ事
文治四年五月十六日
[illegible]
[illegible]

万四　笠女郎
やほかゆく濱のまさこも我こひに[illegible]

嘉応元年入道前関白太政大臣宇治にて河水
ひさしくすむといふことを人々によませ侍りけるに
藤原清輔朝臣
年へたるうちの橋守ことゝはむいく世になりぬ水のみなかみ
日吉禰宜成仲七十賀し侍りけるにつかはしける
[illegible]の濱松[illegible]千代の[illegible]けり
百首歌よみ侍りけるに
後徳大寺左大臣
やほかゆく濱のまさこを君か代のかすにとらむとおきつ嶋もる
家に歌合し侍りけるに春の祝の心をよみ

補陀落の南の岸に堂たてゝいまそさかえん北の藤なみ

八雲抄二大嘗会歌
[illegible]
村上　備中歌人[illegible]

侍りける　摂政太政大臣
春日山都の南しかそおもふ北の藤なみ春にあへとは
天暦の時大嘗会主基備中国中山
嘗　下准之
よみ人しらす
ときはなるきひの中山をしなへて千とせを松の[illegible]
長和五年大嘗会悠紀方風俗歌近江国朝
日郷　祭主輔親
あかねさす朝日の里のひかけ草豊のあかりのかさしなるへし
永承元年大嘗会悠紀方屏風近江国とこ山
式部大輔資業
三位参議有国子
永承六年六月十六日
出家
山とよみ給

古今
まきもくのあなしの山の
やま人と人もみるかに
山かつらせよ

すへらきをときはかきはにもる山の山人ならし山かつらせり

寛治二年大嘗会屏風にたかの尾山をよめる

前中納言匡房

とやかへるたかの尾山の玉椿霜をはふとも色はかはらし（寿）（尾）

文章博士永実子
三位

久寿二年大嘗会悠紀方屏風に近江国鏡山をよめる（近江）

宮内卿永範

くもりなき鏡の山の月をみてあきらけき世をそらにしるかな

拾遺
万代とみかさの山そよはふなる
あめのしたこそたのしかるらし

平治元年大嘗会主基方辰日参入音声生野をよめる（悠紀近江主基丹波）（見于千載）

刑部卿範兼

後拾　小式部
大江山いくのの道の
とほけれはまたふみもみす
あまのはしたて

大江山こえていく野の末とほみ道ある世にもあひにけるかな

仁安元年大嘗会悠紀歌たてまつりけるに
稲舂歌

皇太后宮大夫俊成

あふみのやさかたのいねをかけつみて道ある御代のはしめにそつく

仁安元年大嘗会主基方稲舂歌丹波国（寿永ィ）
長田村をよめる

権中納言兼光（中納言資長子）

神代よりけふのためとや八つかほになかたのいねのしなひそめけむ

主基をあやまりて悠紀とかけり
此時悠紀方季経近江三上山
詠神里等在千載集

八雲云二
元暦　悠　季経
　　　主　光範　おほせあり
又云此歌は俗には悠紀近江
丹波侍中歌也　主基也
青羽山　家経国分
兼源氏花宴巻近江
八雲名所部青羽山下
丹波とかけり　可尋
　　　　　　　可見日

元暦元年大嘗会悠紀歌青羽山

式部大輔光範（永範子）

たちよれはすゝしかりけり水鳥の青羽（若狭）の山の松の夕風

建久九年大嘗会主基屏風に松井

一

権中納言資実（兼光子　二千方作者有疑）

さゝはなれ雲井（備中）れなを移つ乃花さつくとよふらん
人もなる

新古今和歌集巻第八

哀傷哥

題しらす　　（此集雑下　風はやみ荻の葉ことにをく露の　をくれさきたつほとのはかなさ　具平親王）

僧正遍昭

（六　家）末乃露もとの雫や世中のをくれ先たつためしなるらん

小野小町

（家）あはれなりわか身のはてや浅緑つゐには野辺の霞と思へは
（そなしてを　よ　のこさ心しく　已上家）

醍醐乃みかとかくれ給ひてのちやよひのつこもりに

三條右大臣につかはしける

中納言兼輔

櫻ちる春乃末にはなりにけりあまゝもしらぬなかめせしまに（おやなも　家）

末露本滴等句
乃ことにていひし
末の露とよめるを
やうてうろつし
つくしせさせ
そはうとのつゆをえ
めたしきつくを冴
し
六帖是子出せり

兼輔集云三月
つこもりのころ
あめのふる日三条右大臣
乃許にいひやりける
さくらちる
はるのすゑには
その返しに

實方集
おはしますの中将の
おへしろさくらにつけて
すゝきのもし
つくし
あかさりしをやまもこひつらん
ありしむかしをおもひいてつゝ
うくはなくさくらにつけて子孫ちかし
同集にあり

正暦二年諒闇の春さくら乃枝につけて道信
朝臣につかはしける
實方朝臣
墨染のころもうき世乃花さかりおりわすれても折てけるかな
道信朝臣
あかさりし花をや春も恋つらんありし昔を思ひ出つゝ
やよひのころ人々まうてきて歌よみ侍るとて
散らし侍る
成範法師
花ゆゑにまちはゝめて散らんかけまれなきを思ひけれ
人のさそひてをりとるさへそそれ年の暮月なく成る

金葉雜下後三条
院かくれさせ給て後五月五日一品宮
のほとりに侍りける桜の花
をみてよめる
なくさむへくもあらぬ

新古今有此哥
ゆふくれのかくれてしの
その世中にありとみ
を桜の哥

ゆふくれのもしもめて花ゆゑよあかとみゆく
大江嘉言
花こしむこゝろのん人となさやとれ桜にこそ乃春そはの里
ちりしこ侍すこ侍るをみさかりにけり年九日
木をたち山里よこゝとわかみえんだるつゝ
左京大夫顕輔
誰とみよ花乃都よちかまてゝひとりわたりて菊花山
公守朝臣母身まかりてのちの春法金剛院の
花をみて
後徳大寺左大臣
花みてはいとゝ家路そいそかれぬ待らんと思ふ人しなけれは

古今
宿とおもひてすみて
とれんとおもひこん
見つらしいこゆる

後拾遺上　平兼盛
とうしつまにまく
ころもにまかりて
時々いでつゝ
拾遺
花もてさとて散く
こゝろもおほつかなし
とめ給ふ
能宣

千載雜
月のみえ出郷しき是まで人みな人をむかへて
道因法師

新後拾雑下
母の思ひに侍りける春
後京極摂政
のもとより
春霞かすみし空の
なごりさへけふを
かぎりの別なりけりと
申して侍りける返事に
前中納言定家
わかれにし身の夕暮に
雲きえてなべての春は
うらみはてにき

定家朝臣母思ひに侍りける春よ（のイ）暮に遣しける
摂政太政大臣
春霞かすみし空のなごりさへけふを限のわかれなりけり

前大納言光頼春身まかりにけるを桂なる所
にてとかくしてかへり侍りけるに
前右兵衛督惟方（参議）（中納言顕頼子）
たちのぼる煙をだにも見るべきに霞にまがふ春の曙

六条摂政かくれ侍りてのちうへおきて侍りける牡丹
のさきて侍りけるをおりて女房のもとより遣
はして侍りければ
大宰大弐重家
かたみとてみればなげきのふかみ草なになかなかのにほひなるらん

おさなき子のうせにけるがうへおきたるを
菖蒲を見てよみ侍りける
高陽院木綿四手
（金葉連歌）（よき人をしれ [illegible]）（木綿四手）（風のまへ [illegible]）
あやめ草たれしのべとかうへおきて蓬がもとの露ときえけん

なげく事侍りける又の年五月五日人のもとへ申つかはしける
上西門院兵衛
けふくれどあやめもしらぬ袂かな昔をこふるねのみかかりて

近衛院かくれ給ひにければ世をそむきての比
又の年五月五日皇嘉門院にたてまつられける

九條院　太政大臣伊通女

おもひ入草引むすひし世の袂（於秘 尼衣ツミトアリ）にはいかにもりてさらに袖そぬるゝ

御返し　皇嘉門院　法性寺関白女　実雅房公女

はくもこゝろ色かはらすなりにし袖のこそめのはてぬはしとこそ思て

すみ侍ける女なくなりにけるころ藤原為頼か
妻もみまかりにけるにいひつかはしける

小野宮右大臣　清慎公子カ　実資公

よそなれとおなし心そかよふへきたれも思ひのひとつならねは

返し　藤原為頼朝臣

ひとりにもあらぬ思ひは（のイ）なき人も旅のそらにやかなしかるらん

金葉雑下
小式部内侍うせて後
上東門院より年ころ
給りけるきぬをなきあとにも
つかはしたりけるに
小式部内侍とかきつけ
られたるをみてよめる
和泉式部
もろともに苔の下にはくちすして
うつもれぬ名を
見るそかなしき
拾遺哀傷
天暦御製
秋風になひく草葉の
露よりも　下同

小式部内侍露をきたる萩をりたる唐衣きせて侍けるを身まかりて後上東門院より尋させ給ひける（けるに イ按）にたてまつるとて

和泉式部

をくと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなにゝたとへん

返し　上東門院　法成寺関白女

思ひきやはかなくをきし袖の上の露をかたみにかけん物とは

白川院御時中宮なくならせ給て後そのかさ
ねて秋のこゝろけふもなく侍けるに七月七日よ
ちゝの御ことわ侍あらぬとみえ侍

深も　さうけ
法華経の歌の下て
詞書をてみられも
かへしてこほけつらき

周防内侍
わさと来てかくましし草葉の露を形見と思ひけ（ける）や
一品資子内親王にあひてむかしの事とも
申いてゝよみ侍ける
女蔵厳子女王
家集なし
袖のうへ秋の夕暮こそ似たれ涙しわきたる露をとひけむ
例ならぬ事おもくならせ給て御くしおろし給ひ
ける日上東門院中宮と申ける時つかはしける
一條院御哥
秋風乃露乃やとりに君ををきて塵をいてぬることそかなしき

深も　玉葉哭
よそへてみてゝけつを
ちくらまん人あるけるま
つらぬなきしこわ
　　　　　　　　　きぬ

伊勢集云
女郎花をみて
こゝろにかはらて
みりくとそく

秋乃ころをさな紀子にをくれたる人に
大貳三位
別れけんなこりの袖もかはかぬにをきやそふらん秋乃夕露
よみ人しらす
宣長モハヘて　あらぬ
とれそ別露と成しや涙とせて涙よのこしう見えつらん
廉義公乃母なくなりて後女郎花をみて
清慎公
伊勢集
初編集
女郎花みるにこゝろはなくさまていとゝむかしの秋そ恋しき
弾正尹為尊親王かくれて侍けるころ
和泉式部

ガラス使用

源氏　さか木
浅茅生の露のやとりに
君をおきてよもの嵐そ
しつ心なき

周防内侍

わさらゝなくかく置し草葉の露を形見と思ひけさや

一品資子内親王にあひてむかしの事とも
申いでゝよみ侍ける

女御徽子女王

家集ナシ
袖にさへ秋の夕はしられけりきえしあさちか露をかけつゝ

れいならぬ事おもくなりて御くしおろし給ひ
ける日上東門院中宮と申ける時つかはしける

一條院御哥

秋風の露のやとりに君をおきて塵をいでぬることそかなしき

秋のころをさなき子におくれたる人に

大貳三位

別けんなごりの袖もかはかぬにおきやそふらん秋の夕露

返し

よみ人しらず

源氏　[illegible]
やゝもせは消をあらそふ
露の世に後れ先たつ
ほとへすもかな
御法

おきそふる露とともにはきえもせて涙にのみもうきしつむ哉

廉義公の母なくなりて後女郎花を見て

清慎公

伊勢集云
女郎花こそあれ
[illegible]
[illegible]

伊勢集
初句集
女郎花見るに心はなくさまていとゝむかしの秋そ恋しき

弾正尹為尊親王におくれて歎侍ける比

和泉式部

ガラス使用

冨家入道関白忠実
後二条関白師通公子
京極入道関白太政大
臣師実公孫　法性寺
殿父

霞見えをはらふ野辺吹く風の音を聞く袖のうへにおちて

從一位源師子かくれ侍りて宇治より新少将のもとに
つかはしける　　知足院入道前関白太政大臣

袖ぬらす萩のうは葉の露ばかりむかしわすれぬ虫の音ぞする

法輪寺にまうでゝ侍るとて嵯峨野に大納言忠家
が墓の侍りけるほとりにまかりてよみ侍りける

権中納言俊忠

さらでだに露けき嵯峨の野辺に来て昔の跡にしをれぬるかな

公時卿母身まかりて歎き侍りける比大納言實國
がもとに申つかはしける

師光家集云[illegible]
[illegible]比大納言
[illegible]
かなしさは秋の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

後徳大寺左大臣

悲しさは秋のさがのゝきりぎりす猶ふるさとに音をや鳴くらむ

母の身まかりての秋法輪にこもりて侍りけるに
嵐のいたく吹ければ

皇太后宮大夫俊成女

おくれゐて見し世はさがの野辺をよそにして露は涙ぞ[illegible]

母身まかりにける秋野分しける日もと住侍りける所に
まかりて　　藤原定家朝臣

玉ゆらの露も涙もとゞまらずなき人こふる宿の秋風

父身まかりての秋寄風懐舊といふ事を

万十一　人丸集出ず
玉ゆらにきのふの夕へ
見しものをけふのあしたに
こふへきものか

玉葉雑四　前中納言定家母のおもひに侍りける比申つかはし
皇太后宮大夫俊成
とふらひ侍るとて
秋になり風の涼しくかはるにも涙の露ぞしのにちりける

冨家入道関白忠実
後二条関白師通公子
京極入道関白太政大
臣師実公孫法性寺
殿父

寝覚する身を吹とほす風の音を昔は袖のよそに聞けん

従一位源師子かくれ侍りて宇治より新少将のもとにつかはしける

知足院入道前関白太政大臣

袖ぬるる萩乃うは葉乃露はかり昔忘れぬ虫の音そする

法輪寺にまうて侍るとて嵯峨野に大納言忠家か墓の侍りけるほとりにまかりてよみ侍りける

権中納言俊忠

さらてたに露けき嵯峨の野辺に来て昔の跡にしほれぬるかな

師光家集云ちゝけく [illegible]

公時卿母身まかりて歎き侍りける比大納言実国かもとに申つかはしける

和達不審

後徳大寺左大臣

悲しさは秋の嵯峨野のきりきりすなほ古里に音をや鳴らん

母の身まかりにけるを嵯峨のほとりにをさめ侍りける夜よみける

皇太后宮大夫俊成女

今はさは浮世の嵯峨の野辺をこそ露消えはてし跡としのはめ

母身まかりにける秋野分しける日もと住侍りける所にまかりて

藤原定家朝臣

万十一　人丸集出字
玉ゆらにきのふの夕見しものをけふのあしたにこふへきものか
[illegible]

玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人恋ふる宿の秋風

父秀宗身まかりての秋寄風懐旧といふ事を

井蛙抄ニ云新古今ニ父[illegible]
[illegible]秀能[illegible]
[illegible]

よみ侍りける　藤原秀能

露をたに今はかたみの藤衣あたにも袖を吹あらしかな

衣ハ拾[illegible]

久我内大臣春の比うせて侍りける年の秋土御門内大臣中将にて侍りけるにつかはしける　殷富門院大輔

秋ふかき寝覚にいかゝ思ひ出るはかなくみえし春の夜の夢

返し　土御門内大臣

見し夢を忘るゝ時はなけれとも秋の寝覚はけにそかなしき

[illegible]のひく[illegible]けり母女房[illegible]の家に
まかりてよみ侍りける

大納言実家　大炊御門右大臣公能二子

[illegible]秋の[illegible]

[illegible]

西行法師

[illegible]

玄輔集
五月ころ[illegible]女の
[illegible]
[illegible]

ガラス使用

拾秋　読人不知
とふ人もなきあれし
のゝ風に人まつ虫の
なく声ぞかなしき

同行に侍りける人うちつゞきはかなくなりにければ
思ひ出てよめる　前大僧正慈円
恵をこふなみだや独り友ならましやみぢしるべの海

母の思ひに侍りける秋法輪寺にこもりてあらしの
いたく吹きければ　皇太后宮大夫俊成
うき世には今はあらしの山風にこれやなれゆくはじめなるらん

定家朝臣母身まかりて後秋ころ墓所ちか
き堂にとまりてよみ侍りける
稀にくる夜半もかなしき松風をたえずや苔の下にきくらん

堀川院かくれ給ひて後神無月風の音あはれに
きこえければ　久我太政大臣（雅実　六条右大臣顕房公子）
物おもへば色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに
（六帖　吹くれば身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな）

後拾雑三　堀川御
秋風は身にこそしみれ
いかならんあはれ知る人
のうらみしことこそあれ

中納言保実男　通イ
正天永三年正月
廿九日卒

藤原定通身まかりて後月あかき夜人の夢に
見えにあり侍とてよみける哥　（続古　右少弁　定通）
あゝと山の端しらぬ秋とこの世に風吹く人の[illegible]なぬわれは月

源為善朝臣身まかりにけるよの文乃年月として
能因法師
命あればことしの秋も月は見つ別れし人にあふよなきかな

世中はかなく人々おほくなくなり侍りける比中将
宣方朝臣身まかりて十月ばかり白川の家に渡

○[illegible]
後拾遺十哀傷
右大将通房
[illegible]
土御門右大臣女
[illegible]
従二位源隆子

新拾遺秋下　[illegible]

[illegible]紅葉の一葉のこれるをみつけて

前大納言公経

[illegible]山里の紅葉[illegible]

十月はかり水無瀬に侍りし比前大僧正慈圓の
もとへぬれて時雨のなと申してつかはして次の年
の神無月無常の哥あまたよみてつかはし
侍し中に

太上天皇

思ひ出る折たく柴の夕煙むせふもうれしわすれかたみに

返し

前大僧正慈圓

思ひ出る折たく柴ときくからにたくひしられぬ夕煙哉

朝雲暮雨

○大納言右大将[illegible]實白子

雨中無常といふことを

太上天皇

なき人のかたみの雲やしほるらん夕の雨に色はみえねと

枇杷皇太后宮かくれて後十月はかりかの家の人々の中に誰ともなくてさしをかせける

相模

神無月しくるゝ比もいかなれや空にすきにし秋の宮人

右大将通房みまかりて°後[illegible]
てイハ抜

[illegible]

土御門右大臣女
師房　具平親王子

東宮女御集云
おさないの御子ほて
つゝあるを給へる
おもとて馬乃内侍
よろきるつりける
これを人のうとん
とのうはつきしとか
らひさそのいしうか
くちつとしるし

物語子　又の上人のはへらぬへこゝろ
日記　中務集　ゑき人の
わかてのなかりぬめり

よしやる人へてうて
みしるらるの
くしのあるにゝき
つく
又そのしそあく
おゝきしりし人のて
まし給てくまてそう
聞き
ほかせし
いゝへのちきさちにて
おくさた給ひて神子を
うしみみをりれ

まよひさへ乃ちんのかな記以ともせうとしまかゝよ秋かんよ脱みゆる我
秋又女御乃御はてよて先帝れかく我さ海つゝるゝ
さらしとみえ侍りける

高内侍

意見ゆく恋も恋てぬむけしきなれ
ゐし

女御徽子女王

口
いふしへ乃ちの記よ恋すゝるて紅葉の袖のうへにゝわかれ
恒德公のくれにけく後世ありしよ月ゝの紀伊にれ
ひとく月かゝてよみ侍りける

藤原道信朝臣

ほしとみえぬ夜はやことにゝてされはくもりとゝこゝて月とひめるゝ我
本或二との字なし

萬葉云し
入道摂政乃ためよ萬燈會おこなはれ侍りける

東三條院

法興院異白女母
摂津守仲正女

水底よちゝの光はうつれとも昔のかけはみえそそゐる
公忠朝臣身まかりにけるころよみ侍りける

源信明朝臣

不審
ものをのみ思ひねさめの枕には涙かゝらぬあかつきそなき
一條院うくれさせ給ひにけれはそれ〳〵事とものこされ
あはれなる萩よかのこよみえ給ひけれは

上東門院

源も若燈子　殿子和しく
ひもねよりくらしおよのぬ

ガラス使用

斎宮女御集云
おなしの御こゝろにて
つくりおきたまへる
おりもと馬乃内侍
よみてつかはしける
われもと人のかたみ
との[illegible]
ふかきをのこしつゝ
くちせさるらし
[illegible]
馬内侍
尋ねてもあとはかくても
みつくきのゆくへもし
らぬ昔なりけるを
[illegible]
[illegible]
[illegible]
つく
[illegible]
[illegible]
[illegible]
返し
いにしへのなきになかるゝ
[illegible]
[illegible]

よみつさへのえんのかきれはしもせうとしなかなか歌かんはすみえ侍らす

斎宮女御のもとにて先帝のかゝせ給へりける

さうしを見侍りて

馬内侍

出斎宮女御集、

尋ねてもあとはかくても水くきのゆくへもしらぬむかしなりけり

題しらす

女御徽子女王

口

いにしへのなきになかるゝ水くきのあとこそ袖のうらによりけれ

恒徳公のかくれ侍りて後女のもとに月の[illegible]

ひく月かはりても見給ふらん

藤原道信朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
今案云[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

源氏若紫に 殿上わらはへ
[illegible]

夫木廿二との字なし

ほしもあへぬ衣のやみにくらされて月ともいはすまとひぬるかな

第四なし

入道摂政のためにゝ万燈会をこなはれ侍りけるに

東三条院

法興院関白女 母摂津守仲正女

水底にちゝのひかりはうつれともむかしのかけはみえすそありける

公忠朝臣身まかりにけるころよみ侍りける

源信明朝臣

本集

ものをのみ思ひねさめの枕には涙かゝらぬあかつきそなき

一条院かくれ給ひにけれはその御事をのみこひなけきて夢にほのかに見え給ひけれは

上東門院

ガラス使用

何事も今はかはらぬ旅の宿にていつくも君を又いつかみむ

後朱雀院かくれさせ給ひて上東門院白川にこもらせ
給ひにけるをきゝて侍る

女御藤原生子（大二條関白女）

ありしとておもひし家を出ぬれとなほし旅よりかへらん

ねさされかゝる子身まかりにけるに

源道済

なしといふにもいとゝ涙のつゆけきにこの世はたのこゝろ

法成寺摂政女御子
袋草子云後云
夢去之後已く
籠ケル僧ノ夢ニ
見エテ
みち山みゆくへし

後一条院中宮かくれ給ひて後人の夢に

袋ろそ迷れ
へ 光

ふるさとにゆく人もかなつけやらんしらぬ山路にひとりまとふと

らぬ山中よりいつれ
いろよとさんとなん

此乃ニ落テ泣ケル
テ息子ノ夢ニ見エシ

小野宮右大臣身まかりぬとききてよめる

権大納言長家

玉のをのなかきためしにひく人もきゆれは露にことならぬかな

小式部内侍身まかりて後常にもちて侍
りける手はこを誦経にせさせけるに

和泉式部

恋わふときゝにたにきけ鐘の音に打わすらるゝ時のまそなき

上東門院小少将身まかりて後つねにうちとけ
てかきかはしける文の中に侍りけるを
見出て加賀少納言の許につかはしける

ガラス使用

紫式部

誰か世になからへてみむかきとめし跡はきえせぬかたみなれとも

返し　　　　加賀少納言

なき人を忍ふる事もいつまてそけふのあはれはわか身を（あすの）

僧正明尊かくれ侍て後ひさしくまかりて房のまへを
すくるにこほちさして草おひしけりてありて
その夜なかにいろをみて

律師慶暹

あれはてゝ跡をさふとてきてこれはわかぬ所にいと成にけり
世はなれてみるにをしきをみけくに荒ちられくるかな

雑下　屏風の絵に塩かまの浦かきたる所を一条院
皇后宮かくれ給ての後かの宮に侍ける人に
つかはしける
源氏夕皃
見し人の煙をくもと
なかむれは夕の空も
むつましきかな

みちのくに名あるところの絵を見侍て

紫式部

見し人の煙となりし夕より名そむつましき塩かまの浦

後朱雀院かくれ給て後源三位かもとにつかはしける

弁乳母

あはれ君いかなる野辺の煙にてむなしき空の雲となりけむ

返し　　　　源三位

大膳大夫敦親女後
朱雀院御乳母

思へ君もえし煙にまかひなて立をくれたる春のかすみを

大江嘉言つしまのやイになりてくたり侍て帰
りけるをわかれしにみてくたり侍けるに

後拾云つのくに
成くまかりけるに
けるよつかくさ
よりて能因法師も
ともにのりたり
大江公資云
命あらは今かへりこん
つのくにのなにはほりえ
のあしのうら
はに

関よりやすくみやこにかへりきて

能因法師

わか人も命をまもりませえたにんのわしに終らされ

題しらす（式ア大輔）

大江匡衡朝臣（左京大夫重光之子 長和元七十六卒）

致蔵蕾れいとへんつかなかくこなやうくわかし哉

後秋物は侍かわてはつよすんなかるをまえと侍

よ待くらせ侍りてかの御寺

新少将

新拾遺哀傷田上より
まかりけるに
かへり侍りしついて
のわかれまかりしにて
いくへとりめくまゐる
いりにけれ

新少将

ちかきくにゝ
やくしめ
とめし
侍従のなり少将

たちかへるむかしの新田野そてみつは思ひのまゝにいりこれ

かくはひとりの女のもとへなかわ侍よりそてわかき

さくよめる嫡男なとを賀茂のまうしにまかりむとて

みいそく見侍るはかり

按察使公通

かくよむといふことの葉のこそあつまりしおほくれて三輪の形見みかへる

禎子内親王（八イ 母院）（後朱雀院）かくれ侍りて後俊子内親王（後三条）かはりゐ侍りぬ

ねたみぬときゝてかのみたちに侍れは何事もよ

いぬやうに侍るにもいまむし思ひやられて

女房に申侍りける

前按察大納言
左衛門督通季子
久我太政大臣雅実
公子

中院右大臣（雅定 入道）

わすれ川おのれ様てこそ昔こそや昔のかけそ見えね

権中納言通家母かくれ侍りにける秋摂政太政大臣（後京極殿子息光明峯寺）
許につかはしける
皇太后宮大夫俊成
限なき思ひの程の夢のうちはおとろかさしと歎こしかな
返し　摂政太政大臣
見し夢にやかてまきれぬ我身こそとはるゝけふもまつ悲しけれ
（深き若紫　[illegible]）
母の思ひに侍ころ経文なと[illegible]
わ[illegible]かりて侍けれはつかはし[illegible]
藤原清輔朝臣
墨染の色[illegible]むかしに[illegible]

後拾　哀傷　実方
[illegible]
千載哀三　小侍従
見し夢のさめぬや[illegible]
夢中説夢

無常の心を　西行法師
いつ歎いつ思ふへき事なれは後の世しらて人のすくらん
前大僧正慈円
みな人のしるかほにしてしらぬかな必しぬるならひ有とは
昨日見し人はいかにとおとろけとなを長夜の夢にそ有ける
ふるさとをこふる涙や独行友なき山の道芝の露
我[illegible]
前参議教長高野にこもりゐて侍けるか
やまひ限りになりぬとききて頼輔卿まかりける
ほとに身まかりぬと聞てつかはしける

仁王経曰
生者必滅

拾哀傷　藤原為頼
世の中にあらましかはと思ふ人のなき
かおほくもなりにけるかな

ガラス使用

寂蓮法師

ゆきてつゐにわかれとならむもしらん谷にくよ山路の末てる處
人よきかれくなけけよろ人のはらつけゐ

西行法師

なき跡の面影をのみ身にそへてさこそは人の恋しかるらめ
あけく事侍ろ人とひさ恨侍るれを
わかれもしなよ思ふ額もるおえれぬへてをひをそ無せぬ

拾遺集　平貞文
なきをいつかとおもふ
まちわひぬとりの
つらしとこそおもへ
とはまし

無常の心を

入道左大臣

ほりとめりへのかをまへてもおもれとうれいはる

左近中将通宗の墓所によまかりてよみ侍りける

土御門内大臣

をしれぬるくみこそ道てきえかさことの何海の

覚快法親王かくれ侍りて周忌のはてに墓所に
まかりてよみ侍りける

前大僧正慈圓

そこはかと思ひつゝけてきてみれは今年のけふも袖はぬれけり

母のためにあはたくちの家にて仏供養し侍り
ける時よろかみかまかりてきわひく娘かもとより
けなくて侍りしに志のひ侍るかわしと雨のこさ
らしぬわかれなくかつらしとて墨の堂なん

きゝしはかさつけてみゆる

右大将忠経

涙をもみな渡れる身よ世にまかせぬ宿をいつか流れぬらん
なくなる人の数をそへてにかゝさてみえ
待ちたるよ

法橋行遍　継母弟　小乾子

思ひ余る世にもあはれさへ過ぎし草かげをとくさへひは袖そ
子の身の有明のはなつかれ年の夜々の家のあはれ
うきかたにそれ積のありかれよあらん

祝部成仲

わかれゆくむねの思ひとや袖の露をそへてさらに恋ひぬべき

新勅撰遠哀傷　子にみむすめ歎き侍りけるを
聞くつけしかれ
すゝみつゝこそあはれに
それはかの又ふる人のさきに
ちらるゝを
　　　　　　　祝部成仲
女
思ふとも誰れ家の
そゝきれ　うらうさ
めとこそおもひて

能因法師身まかりて後によみ侍りける

藤原兼房朝臣　右衛門佐　中納言兼隆子

この世にはしりもみぬくいなき道と家こそわれいはでやみぬる

書なく成にける年の秋の二條関白家侍に
中将ふりし給ひ

権中納言通俊

きのふまで見し宿の秋に露の涙にしほるゝ秋の移さえ

堀河院かくれさせ給ひてのちよめる

権中納言国信

君なくてよるかたもなき青柳のいとゝうき世そ思ひみたるゝ

かのひたる女山里にかくれてなかはなれつれ

新勅撰雑三　長承のころほひ
作者の名にかけしるし侍りて
言の中　権中納言国信
君なくて草木の葉のかす
みよとてもゝ花もるゝされ
待ちし夜なつゝしみつれに
あはれとかれてとある
思ひ余るにけりとさま
やくしさのうらし
せよりしれ
みかれし水香陵たまのつ
て君葉をこえもしはらる
堀川院御製典侍

古てらつ濱ニ深きてゝて
りらぬし深き色まつらん
まと何川池ともの
まれあらしん読
よりつく

万二云 高市皇子
尊城上殯宮之時
柿本朝臣人麿作
歌一首并短歌
此短歌二首あり
内一首也

これも万葉ニ高市
皇子殯宮の長歌
乃反歌也詞書の誤
と知るへし

そして人のもとへ此
業とおほしきを世の中
乃あはれなることを採
ちる新朝臣と云人

源氏頂雲 そしてあはれとて
ともしくいもちゝ

小大君集云
あはれとちゝあまし

はれぬことをわかぬくもけれのわくきぬよまつ人
うきてわつまのふゑの人まよ鳥まれぬれて人くさ
しくれゝ　左京大夫顕輔

河乃ますかみを山の日長をてらすそひ思ふゐる
葉良河門をなきぬるそてまつかゝるをみゆく

人麿

（万二 人丸集）久方のあめにしらるゝ（ら万）君ゆへに月日（日月）もしらて恋渡るかな（かも 万）
数しらへ　小野小町

あるはなく世中に家つくれめりすて難ん（まてあらんとすらん）（ふえとおほく）

在原業平朝臣

（伊勢）しら玉か何そと人のとひしとき露とこたへてきえなましものを

後撰秋中 母のいもうとの（?）
仕りし先帝の御文給へりける
返しつる　五月のつこもりに
とくとくはやしく吾ことを
秋のつこもり御よし
あらしも秋をむしさ此つあとする
ひとへん御なつゝて云　延喜御製
更深のことをいこれ
ともしいはるゝものこき
とゝゐるまて
かれ

更衣乃服まて見いまはきうとみしまかく

（此イ）延喜御哥（延喜御哥 此集并三十文御製 中ノ源国子なし）

秋風かくとわかめの雲深乃こゑ梅それ御覧の
松ひとて人の家まやとれわ苗ゆとて風まつ
見すれ草れ哉くそれわかれつらぬ

中納言兼輔

人の親の心（こゝろはやみに）はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬるかな
やまひもたつかれはなくこともせかそいへ
あなまくらうちみゆて内よりこゝて在大

京集云 亡し
あはれなる人のあはれを
こしらへくめよ昔
よりこれ（てまとあ
まなしかり

古[illegible]つゝ[illegible]住[illegible]て
[illegible]
[illegible]河[illegible]
[illegible]
[illegible]

はれぬることわりなくもほけおのわするゝ海よ思ひ出
うゑてわすれ草[illegible]
しほれけれ

左京大夫顕輔

万二云　高市皇子
尊城上殯宮之時
柿本朝臣人麿作
歌一首并短歌
此短歌二首ある中
の一首也

いつのまにみを山かつになしはてゝ都をたひと思ふなるらん[illegible]
[illegible]をたき[illegible]てまつ[illegible]みく

人麿

これを万葉には高市
皇子殯宮時の長歌
乃反歌し詞書の[illegible]
と見えし

（万二　人乃知）久かたのあめにしをるゝ君ゆへに（らん）月日もしらて恋わたるらん（かも　万）

小野小町

[illegible]人のちくなる[illegible]比
[illegible]世の中
乃あはれなることを[illegible]
[illegible]と人
世の中にあ[illegible]
[illegible]

わすれなくなれる[illegible]世の中に[illegible]れ[illegible]まて[illegible]

在原業平朝臣

これを[illegible]業平の母なる人
小大きみ[illegible]
あるま[illegible]

後撰秋中　母の[illegible]
侍りける先帝の御文[illegible]
[illegible]　五月の[illegible]
[illegible]
秋の[illegible]
[illegible]秋[illegible]
[illegible]　延喜御製
[illegible]
[illegible]
[illegible]

（伴あ）忘るらんと思ふ心のうたかひに[illegible]
[illegible]乃[illegible]月[illegible]

近江守[illegible]
[illegible]此集[illegible]
[illegible]

延喜御製

[illegible]かくことわりなく[illegible]
松ひとつ人の家にやとれ[illegible]
忘れ草[illegible]

中納言兼輔

家集云[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]人を思ふ心の忘れ草[illegible]やとにやまきし
やまひ[illegible]
あたまくら[illegible]

ガラス使用

弁公忠義人に侍けるにあひて又あさてはかり
まうてこむよし申て侍けるかわつらひてはかなくなりに
やまひおもくなりてかきりに侍けるに公忠朝
臣につかはしける

藤原季縄　左中弁千兼子　左少将

大和物語
くやしくそ後にあはむと契けるけふをかきりといはまし物を

母の女御かくれ侍りて七月七日によみ侍ける

中務卿具平親王

墨染の袖は空にもかさなくにしほりもあへす露そこほるゝ

うせにける人の文の物の中なるを見いてゝ
そのゆかりなる人のもとにつかはしける

紫式部

古本ニし
あはれしぬるをみて
おもへともなをあすしの
はてとなりにけるかな

暮ぬまの身をはおもはて人の世のあはれをしるそかつははかなき

ガラス使用

新古今和歌集巻第九

離別哥

みちのくへまかりける人に装束をくるとて
よみ侍ける　　紀貫之

家六
玉ほこの道の山風さむからはかたみかてらにきなんとそおもふ

題しらす　　伊勢

家
忘なん世にもこしちのかへる山いつはた人にあはんとすらん

わさかりし筑紫へ人のめのとまかり侍る
紫式部

うへのかきし
おかきし

北へゆく雁のつはさにことつてよ雲のうはかきかきたえすして

ガラス使用

ゐなかへまかりける人に装束つかはすとて

大中臣能宣朝臣

秋霧のたつ旅衣おきてみよつゆはかりなる形見なりとも

みちのくにまかりて侍ける人に

貫之

みくにゝもわかるゝぬさをまはにみちのかきりはまつそたむけん

家集云 [illegible]

[illegible]

あるみなもとのさねらつくしへ [illegible] 侍りける人に餞し侍るとて

中納言兼輔

[illegible]

寂照上人入唐し侍けるに装束をくるとてよめる

あちらなるをきておひくつゝしける

よみ人しらず

きならせと思ひし物を旅衣たつ日を志らず成にけるかな

返し

寂照法師

これやさは [illegible] 衣

[illegible] 守にまかりける人のわかれ惜しみ侍りけるに [illegible]

源重之

みちのくに [illegible]

ガラス使用

[illegible]

高階經重朝臣

行末にあふくま川のなかりせはいかにかせまし今日の別を

藤原範永朝臣

君に又あふくま川を待つへきに残りすくなき我そかなしき

太宰帥隆家下り侍りけるに扇たまふとて

妍子法成寺摂政女

枇杷皇太后宮

涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ

續古離別亭子院宮の瀧御覧しに
[illegible]

亭子院みやの滝御覧しにおはしましける
御ともに素性法師めしくせられけるを[illegible]

[illegible]

十月十日[illegible]

侍らさりけるより人侍る所に

一条右大臣 恒佐

神無月[illegible]今日別るゝは[illegible]川の遠さん

題しらす

大江千里

別ては後も逢はむと思へともこれを[illegible]

此母の[illegible]

成尋法師入唐し侍りけるに母のよみ侍りける

もろこしもあめの下にそありときくてる日のもとをわすれさらなん

拾遺四 実方

[illegible]

源重之

[illegible]

修行にまかり出るとて人の許につかはしける

道命法師

[illegible]浪の[illegible]

光あるむやの七月七日にくたりけるを
こゝろえぬらしとおもひて八日の暁おきゐて私に
のちのあしたに遣はしける
加賀左衛門（加賀守丹波奉親女 入道一品宮女房）
あまの川のちのけふたにはるけきをいつともしらぬ舟出かなしな
實方朝臣みちのくにへくたり侍りけるに餞すとて
よみ侍る　　中納言隆家
中関白道隆公息
わかれちはいつもなけきのたえせぬにいとゝかなしき秋の夕
くれ
藤原実方朝臣　返し
とゝまらん事は心にかなへともいかにかせまし秋のなさけを

七月はかり大宰府へくたり侍るとて都の人にいひ
りける　　前中納言匡房
都をは秋とゝもにそ立そめしよとの河霧いくよへぬらん
従三位資業子
みこの宮と申ける時大宰大貳実政学士にて
侍りける甲斐守にてくたり侍りけるに餞たまはす
とて　　後三条院御製
思ひ出はおなし空とは月を見よほとは雲井にめくりあふ
まて
於拾　橘直幹
わすれなよほとは雲ゐになりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて
みちのくにのゝこりとゝめ乃朝臣ひさしくあひみ
ぬらし申ていけのあらきりしといふことも侍りけれは
藤原基俊

詞花別　津守国基
むしもとゝて玉なゝし
おまへん行なかりら
またこゝろめそして
いつしかおとめも

ゆらん稀思ふもとこそはるふん我身こそいとゞ老ぬれ
涙行かくねぶらんよゐに

大僧正行尊

都にも定なき世にはなれさにけりとみえしとそれ
みやこには見やこそとまれまてこそ人かわかれよ
世は汝なり

読人しらす

雅(?)もしらぬ旅にてさしおかれ
別の色をみよ

後恵法師

かゝる身の別とは思へといかやゆくとの旅にさなへ

登蓮法師

新千載羇旅
正治二年百首歌奉りける時羇旅の心を
松浦よりこゝろはかりにおくれぬらんもろこし神もたもしけれ

立わかれ袖をも人にかはしてもゆふ我身にかせて

守覚法親王五十首歌よませ侍りける時

藤原隆信朝臣

雁こうしと志てぬ夜かをしか記松浦の沖をこぎぞ離れぬ

登蓮法師筑紫へまかりけるに

後恵法師

ちかくとも雲井のよそにをもひやるそてわかれやしるらん袖の神はしける

西行法師

後拾遺別　堀河院御
山のはに月をみしともおもよ
秋風吹く旅も忘れし
詞花別　皇太后宮甲斐
くもゐにまかれもゆくすゑのこゝろ
ちからへきことをしらぬ
みやこにてまよ

みちのくへまかりけるに野中に饒しけるに

都にて月を哀とおもひしは数よりほかのすさひ成けり

こしのくにゝ修行せむとてまかりける人に別
をしみくらし侍けるに
あはれぬとおもひし君もこれやかくさしとみんなつるゆきとかく
さりともとおもふ心をあはれむしかすての山路を越ぬなら
とほき国へまかりける時師光餞し侍る
によめる　道因法師
かりそめの別と今日をおもへども老やまことの旅となるらん
題しらず　皇太后宮大夫俊成
きみいなば月まつとてもながめやらむあづまのかたの夕ぐれの空
祝部成仲

後拾遺恋四
元輔
ちぎりきなかたみに
袖をしぼりつゝ末の
松山波こさじとは

別れし今日又とやこのたびの山を越れかへらず今にゆかさむ
藤原定家朝臣
わすれなよやどるたもとはかはるともかたみにしぼる夜はの月かげ
都のかたへまかりける人にをくりてよみけるに
雅明親王
かへると思ふなかにも急て去りゆかまくるゝ撫の袖の露
ゆく人の海のまよりもつきにしてわかれの
とめかねてとて　よみ人しらず
ゆくへえぬとそらにあふみしと月をしらずともあふ
とほき国へまかりける人につかはしける

大蔵卿行宗

別路は雲ゐのよそになりぬともそなたの風のたよりすくすな

人の国へまかりける人に狩衣つかはすとてよめる

藤原顕綱朝臣

あ霧の[illegible]旅のかり衣[illegible]見ん[illegible]

新古今和歌集巻第十

羇旅歌

和銅三年三月藤原の宮よりならの宮にうつり給ける時

元明天皇御歌

此歌ハ雑ニ入へし

六 万一

とふ鳥のあすかの里をおきていなは君かあたりはみえすもあらなん

あすかハ六

[illegible]六

天平十二年十月伊勢国にみゆきし給ひける時

聖武天皇御歌

四六

いもにこひわかの松原見わたせは塩のひかたにたつ鳴渡る

[illegible]万

[illegible]けり

六

六
人丸集

山上憶良

ロ一 いさこともはや日本へ大伴のみつの浜松まちこひぬらん

題しらす　人麿

ロ三 海さかるひなの長ちをこきくれはあかしのとよりやまと嶋

ロ二 篠の葉はみ山もそよにさやけとも我はいも思ふ別きぬれは

[illegible]

大納言旅人

ロ三 こゝにありてつくしやいつこ白雲のたなひく山の方にしあるらし

題しらす　よみ人しらす

ロ九 秋六 あさ霧にぬれにし衣ほさすしてひとりや君か山路越ん

[illegible]

在原業平朝臣

伊お 信濃なるあさまのたけにたつ煙をちこち人のみやはとかめぬ

するかの国うつの山にあへる人につけて京につかはしける

伊お 駿河なるうつの山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

延喜御時屏風哥　紀貫之

六 草枕ゆふ風さむくなりにけり衣うつなるやとやからまし

家集云承平年（上云天慶三年）さい
しやう中将屏風の歌
[illegible]
又中将の歌とあれは
宰相中将敦忠朝臣
家屏風によませらる
とのこゝ出侍し

若乃
あけの山のつけ
むらさきのみえぬの
ふつかりくらし

斎宮女御集云
みよし わいまし
拾遺雑上 斎宮
後九条右大臣女五女
ととのへて侍りけるを
いまの御代のこころ
あらまほしくて

題しらす

皇のひさしきよゝのかはしき堂の荒れつゝくの露哉らし
（延喜の末つかた延長七年のころ奉りの屏風のうた）（あれにしあとのつきん）

壬生忠岑

東路やさやの中山さやかにも見えぬ雲ゐに世をやつくさむ
（家集追入）（のイ）

伊勢にまかりけるか

斎宮徽子女王

人をなほ恨つへしや都鳥ありやとたにもとふをきかねは

題しらす　　　　菅原輔昭

またしらぬ故郷人はけふまてにこんとたのめし我を待らむ

読人しらす

しら鳥のさき坂山の松かけに宿りてゆかむ夜もふけゆくを
（万七）（くれぬとも 万）

神風の伊勢の浜荻折ふせて旅ねやすらんあらき浜辺に
（万四）（や六）

亭子院御くしおろして山々寺々修行し給ひけるころ御ともにて和泉国日根といふ所にて人々うたよみ侍りけるによめる

橘良利

故郷の旅ねの夢にみえつるは恨やすらん又ととはねは
（大和物語）

しかのゝ山にて流れかゝりこゝろに留め給ふを見れは
いふ所に旅人やとりて立わかれしあつ河と

藤原輔尹朝臣

ガラス使用

雑賀 於
おほつかなみをし
ましらわけはまち
のふきやとらし
みへすあふまし

あかりし夜半わけぬるのつゆや袖せやとかへりかへらんかりわ
かわ

題しらす　済祇宣旨

都あらくおもひしられそとおもひつゝ宿をねこひ旅よりかへりわ

へ唐し侍ける時つ海つまとへのさい侍
これなん

法橋貢恵

旅衣あらき浪路をはなれていさゝてさしれはしとこれ
とそ

さすかに浪の海よ海わたりておそしきかよにみよ

題わからんよみ侍ける

藤原実方朝臣

あかりし今夜うわいはしおもひしさかれ浪まよひさし
とし

いそのかみのふることゝ修行し侍けるにとわ

むしあかきる同しとよ〇〇らしなとひくりぬれ

つやのかくに年ころとてわたりぬ〇のみちろとかは

修行者みにこえされともとてよみ侍ける

大僧正行尊

我とくは旅とはつ〇にわ海とへゆゝなかなかにさきれ旅ここよ

あふみのうみにて夕立しぬへきよしゝぬつかさし

申けるときによみ侍ける

紫式部

かきくもり夕立浪のあらけれはうきたる舟そしつ心なき

ガラス使用

肥後守定成女

天王寺よりかへりまうでけるみちのうらにて海わ
難波の人侍る所
肥後

さ夜ふけてあしの末こす浦風にあはれうちそふ
なみのおとかな

大納言経信

此歌[illegible]
[illegible]

旅ねして暁かたの鹿のねにいなはおしなみ秋風そ吹く

恵慶法師

わなよ色こたる鹿のなくなる[illegible]
後冷泉院御時人々に鹿の哥よませ給
けるに

参議從三
大納言隆國男

右近中将隆綱

[illegible]かは梅く吉野の山里に夜かれて鹿の音をそ聞
[illegible]侍けるに人々多くまうてゝつとめて
てらにまうてゝあかつきに草のはしをひく
枕にせしあかぬひかて侍けれはよみ侍る

赤染衛門

何となし世の鹿なてさひとをわかさめ起目とも露けは
草の枕に

堀川院百首哥に

権中納言國信

山遠くそあらちかふわれしる露の暁は[illegible]

大納言師頼

此集云 藤原惟成
まくらにしまつ[illegible]
うしさ月の[illegible]
此月を人ましても

草枕鹿の[illegible]

水邊旅宿といへる事をよめる

源師賢朝臣（三木資通子左中弁　承暦五年）

つきみれは思ひそあへぬ旅ねしてみなとやよするしら浪
きしかけてことゝふよりも見えける

大納言經信

旅ねするあしの丸屋のさむけれはつまきこりつむ舟いそくなり

題しらす

み山路にけさやいてつる旅人の笠しろたへに雪つもりつゝ

旅宿雪といへる事をよめる

修理大夫顯季

松か根に尾花かりしき夜もすからかたしく袖に雪はふりつゝ

みちのくにまかりけるころ八月十五夜に京を思
ひ出て大宮の女房のもとにつかはしける

橘為仲朝臣

みし人もとふの浦風音せぬにつれなくすめる秋の夜の月

せきとのゐんにて羇中見月といふ
事を

大納言

草枕旅ねの床にいくよかもなくつゝ夜そらの月をみるらん

守覚法親王家に五十首歌よませ侍けるに＋
旅の哥　皇太后宮大夫俊成

山城乙訓郡ト摂津嶋上
郡ノ境也山崎ノ西ニアリ
拾遺別　源公忠ノ大
関くらうはまさきと
の花もくれのあやしと
けふよ別てこゆく

平兼盛

まちう成旅の空なるも
みやこぬゐしらぬきい
秋のよの月

新後拾遺　読人しらす
夜川のさはの篝を
うちうさきらいけみち
そのかたを思き

古今
月をあはれといふは
忌なりといふ人の
ありけれはよめる
よみ人しらす

夏かりのあしのかりねもあはれなり玉江の月のあけかたの空

たちかへり又もきてみむ松しまやをしまのとまや浪にあらすな

藤原定家朝臣

深き明石　まへつ名やもあはれくうきたの湊方まてあとそくへし

ことゝへよおもひおきつのはま千鳥なく〳〵出しあとの月影

藤原家隆朝臣

野辺の露うらわの浪をかこちてもゆくへもしらぬ袖の月影

羇旅歌とてよめる

摂政太政大臣

もろともに出し空こそわすられね都の山のありあけの月

題しらす

西行法師

都にて月をあはれとおもひしは数よりほかのすさひ成けり

新後拾遺　和泉式部
みる人をおもひおこせて
ことのはのこゝろしのふる月
と詠らん

五十二

月みはとちきりおきてしふるさとの人もやこよひ袖ぬらすらん

五十首哥たてまつりし時

家隆朝臣

あけは又こゆへき山のみねなれや空行月の末のしら雲

藤原雅経

古郷のけふの面影さそひこと月にそちきるさやの中山

和歌所月十首哥合のついてに月前旅といふ心を

人々つかうまつりしに

摂政太政大臣

わすれしとちきりて出しおもかけはみゆらん物を故郷の月

百十五
新古今
秋の夜の月をみるにも
かへるさの都の空を
思ひやるらん

ガラス使用

六百番歌合乃時
旅恋し

猿乃音とてよみ侍けるに
前大僧正慈円
ましらなく夜半のあらしとかはるらんみやこのゆめ路うちさます
涙そふ夜とは思ふ事ともしられけれ

万一
神風のいせの浜荻
折ふせて旅ねや
すらんあらき浜へに

越前
さよふかく月とあはれにかたしきて浪よりかゝる伊勢の浜荻

百首歌たてまつりし時
宜秋門院丹後

万十二
すゝか河やそせ
わたりて誰ゆゑかよ
こえにこえんつまもあらなくに

しらさりしやそ瀬の浪をわけ過てかたしくものは伊勢の浜荻

前中納言匡房

万
神風のいせの浜
荻をりふせて
旅ねやすらんあらき
浜へに

風さむみ伊勢の浜荻わけゆけは衣かりかね浪になくなり
権中納言定頼
いそなれぬ心そたへぬ旅ねする蘆のまろやにかゝる白浪
三体 新字

百首歌たてまつりしに
式子内親王

万一
君か代も我代もしれ
や石代の岡の草根
をいさむすひてな

行末ハ今いくよとかいはしろの岡のかや根に枕むすはん
松かねのをしまか磯のさよ枕いたくなぬれそあまの袖かは

[illegible]

千五百番歌合に
皇太后宮大夫俊成女
かくてしもあかせはいくよすきぬらん山路乃苔乃露のむしろに

ガラス使用

若此字は　つもも
うら旅ねをやるらん
かけのまゝなれ
やくしさらにも
うきことのま

旅にてよみ侍ける

権僧正永縁

白雲のかゝる旅寝のならはぬに深き山路に日は暮にけり

菅原し行宿とつゆかき袖

大納言経信

ゆふ日さすあさちか原の旅人はあはれいつくにやとをかるらん

摂政太政大臣家歌合に羇中晩嵐といふ事をよめる

藤原定家朝臣

いつくにかこよひは宿をかりころも日もゆふくれの峯の嵐に

旅歌とてよめる

旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし

藤原家隆朝臣

ふるさとにきゝし嵐の声も似す忘れぬ人をさやの中山

藤原雅経

白雲のいくへの峯を越ぬらんなれぬあらしに袖をまかせて

源家長

けふは又しらぬ野原に行暮ぬいつれの山か月はいつらん

和歌所歌合に羇中暮といふ事を

皇太后宮大夫俊成女

新拾遺旅
兼好法師
こしのまゝいく重
ふみ結ふ宿の
きかくる月に
らん

[illegible]とて、この所のことを[illegible]ける

雅經朝臣

業平
信濃なるあさまのたけにたつ煙をちこち人のみやはとかめぬ

いたつらにたつやあさまの夕煙さとひかぬるをちこちの山

宜秋門院丹後

古恋一
夕くれは雲のはたてに物そ思ふあまつそらなる人をこふとて

[illegible]

藤原秀能

草枕ゆふへの空を人とはゝなきてもつけよはつかりのこゑ

旅の歌とて

有家朝臣

ふし侘ぬしのゝをさゝのかり枕はかなの露や一夜はかりに

石清水哥合に旅宿嵐といふ事を

[illegible]の家はあらしをしきて独やねなむさ夜の中山

たひのうたとて　藤原業清

誰となき宿の夕をちきりにてかはるあるしをいく夜とふらん

羇中夕といふ事を

鴨長明

枕とていつれの草にちきるらんゆくをかきりの野邊の夕暮

後拾遺旅　[illegible]
[illegible]

民部卿成範

少納言通憲子
民部中納言

みち野邊の草の青葉に駒とめて猶故郷をかへりみるかな

長月のころ初瀬にまうてけるみちにてよみ侍

続千載雑　[illegible]
[illegible]
法印定為
[illegible]

[illegible]　　　禅性法師　少将乙王子
初瀬山夕こえくれて宿とへはみわのひはらに秋風そ吹く
[illegible]　　藤原秀能
さよふけし秋の猿の[illegible]松より[illegible]山の[illegible]
摂政太政大臣家歌合に秋猿といふことを
藤原定家朝臣
[illegible]聲そ[illegible]山乃[illegible]松風
百首歌たてまつりし時猿歌
藤原家隆朝臣

[illegible]一聲[illegible]清見かた浪よりいつる[illegible]風
千五百番歌合に
[illegible]松ならん神の浪や[illegible]
[illegible]
入道前関白太政大臣
[illegible]
堀河院御時百首歌[illegible]猿歌
藤原仲實朝臣　中納言資仲子　大納言資平孫
[illegible]
入道前関白家百首歌に猿の[illegible]

[illegible]

万土
[illegible]

月清集 [illegible]
[illegible]

皇太后宮大夫俊成
難波人あし火たく屋に宿かりてすゞろに袖のしほたるゝ哉

題しらす　権僧正雅縁（内大臣雅通子）
又越ん人もとまらはあはれしれわかおりしける嶺の椎柴

前右大将頼朝
道すから富士の煙もわかさりき晴るゝまもなき空のけしきに

述懐百首歌よみ侍りけるに（みイ）旅の歌
皇太后宮大夫俊成
世中はうきふししけし篠原や旅にしあれは妹夢にみゆ

千五百番歌合に

[illegible]

宜秋門院丹後
[illegible]旅にし海のみやこ島[illegible]

天王寺へまうてけるに俄に雨ふりけれは江口に宿をかりけるにかさゝりけれはよみ侍る
西行法師
世中をいとふまてこそかたからめかりのやとりをおしむ君かな

返し
遊女妙
世をいとふ人としきけはかりの宿に心とむなと思ふはかりそ

和歌所にてをのことも旅の歌つかうまつりしに

源もとし
あつしらくちくぬるきまふ候
乃ちらとははふ方より見つ所ん

武蔵にてかくぬけ
まへ信の玄ハ之方
よ見て見ん

まつりしま
藤原定家朝臣
袖に吹けさそな旅ねの夢も見し思ふかたよりかよふ浦風
家隆朝臣
旅ねするゆめちはゆるせうつの山関とはきかすもる人もなし
待そとこゝよわたる旅ゆくし山路秋もりこえこ
あつまちと
藤原定家朝臣
都にも今や衣をうつの山ゆふ霜はらふつたのしたみち
隆長朝臣

袖にしも月かゝれとはちきりおかす涙はしるやうつの山こえ
前大僧正慈圓
まつこ山秋の仏の袖と見えよ本ら風にこゝろハしくれそわ
百首哥たてまつりし
猿哥（内イ猿）
さそわ須磨のいそに入ぬれは露にまつさきのとまそ
ちるをよまうてこの人さしわせら川のそうとつみ
やとわ旅ねけん夜よ見ん侍らま
素覚法師
あふ坂に見へん出て見わ侍る川をくらぬほとり法衛たゝさ
かけまれとこよ海のわきるよりみん侍らん

作者アリ
俗名藤原家基
刑部少輔
左大臣家出羽伯老子
家光子
玉保延二年

853
166

3193

古今
[illegible]

西行法師
年たけて又こゆへしと思ひきや命なりけりさやの中山

猿哥とて
思ひとく身のこゝろこそ[illegible]袖の[illegible]

熊野へまいりけるに猿のこゑを聞て
太上天皇
[illegible]山風にのる声きけは都も恋しさ[illegible]

ガラス使用